

主題	いつまでも口から食べる大切さ。口は健康の入り口です。
副題	口腔ケアの充実で誤嚥性肺炎による入院を減らし、嚥下状態を確認することで経口摂取を維持する。

口腔ケア	経口摂取維持	研究期間	24ヶ月
------	--------	------	------

事業所	特別養護老人ホーム しらさぎホーム		
発表者：青木純、管家ひとみ (あおき じゅん、かんげ ひとみ)	アドバイザー：		
共同研究者：野上妙子、齋藤美和、三成富美子、奥久美子、川島雅明			

電話	03-3336-6511	E-mail	nakano-j@nfsj.jp
FAX	03-5356-1251	URL	http://www.nfsj.jp/

今回発表の事業所やサービスの紹介	<p>社会福祉法人 中野区福祉サービス事業団 しらさぎホーム 平成6年に開設した特別養護老人ホーム(85床)、併設短期入所生活介護(9床)の施設です。おむつに頼らない自然な排泄の促しのため定時誘導から随時誘導に変換しました。次に健康の入り口である口腔の衛生や機能を維持する取り組みを推進することで安定した体調管理に努めています。</p>
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

入院の原因となった病名を調べると誤嚥性肺炎が年間10名以上であることが分かった。誤嚥性肺炎の原因は、胃内容物の逆流もあるが、口腔内細菌を含んだ唾液の誤嚥であることが大きい。また、毎月実施している歯科医による健診では「口腔内に食残があるので丁寧な清掃を行うように」というコメントが続いていた。毎食後に口腔ケアを実施しているがなぜか。まずは、口腔内を清潔にすることで食事がおいしく食べられること。さらに、胃瘻造設者が常時10名程度いる中で経口摂取維持の取り組みも課題であった。健康管理上で重要である口腔・嚥下に関するケアをいかに推進していくか、対策が不十分であった口腔ケアを徹底することで誤嚥性肺炎の予防など実質的な成果が本当に得られるのか、介護サービスの改善を検討する委員会ではケア方法の再周知から始めることとした。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

口腔ケアは、健康の入り口である。口腔ケアにおける適切な介助方法や注意点を正しく理解することで口腔内の衛生が改善し、誤嚥性肺炎による入院が減少することを目指す。経口摂取維持に関しては、入所者の嚥下状態をVE(嚥下内視鏡)検査による診断で正確に把握できることで、誤嚥の危険性が明らかになり、適切な介助方法や対応策が導きだされる。食事介助する上で誤嚥の危険を回避しながら実施することができることで経口摂取が維持され、入所者にとっては穏やかな生活が持続し、職員にとっては入所者の状態を知った上で安心して介助することができる。さらに、職員が口腔ケアや嚥下状態に意識が向くことで入所者全体の状態変化に気づき、施設として体系的に取り組めるようにしたい。

《3. 具体的な取り組みの内容》

委員会が中心となり特養入所者85名を対象に進めた。取り組みの成果を可視化することを考え、毎月の歯科医の健診による評価をケアの改善項目に反映させ、さらに口腔機能維持管理体制加算が算定できるように進めた。そして、個々に合ったケアのため口腔ケア用品の種類を増やした。また、食事介助者が増加している中で、職員の思いとして誤嚥性肺炎の危険がなく、経口摂取が問題なくできているのかと不安に思いながら介助している状態が続いていた。そのため理学療法士、管理栄養士等と相談し、食事中のポジショニングや介助方法の検討をした。さらに、嚥下状態確認のためVE（嚥下内視鏡）検査実施を検討し、どのようにして実施機関を求めるのか模索していた。そのような中で中野区内の歯科医師を対象としたVE検査の研修事業を施設で受け入れるよう要請があった。これを機に、嚥下状態を正しく診断することがとても大切で、入所者に安心して食事が提供できることを実感した。その後、VE検査については、正式に歯科医師に依頼し、継続的な検査が行われるようになった。

《4. 取り組みの結果と考察》

課題については、介護サービス改善委員会で毎月の取り組み経過を報告検討することで推進した。歯科医による評価は、開始から6ヶ月ほどは十分に汚れが取れていないというコメントがあった。しかし、その後は、健診する入所者のほとんどが、口腔内がきれいになっているというコメントに変わり成果が現れた。また、毎年、誤嚥性肺炎で入院する利用入所者が年間10名ほどいたが、現在は2名へと減少した。さらに、VE検査の実施により適切な診断をもとにした介助方法や経口摂取維持のための対策などが定着することで安心安全な食事介助が行えるようになり、実施対象の入所者以外にも対策が必要かどうかという観察力、考察力が備わった。

《5. まとめ、結論》

今回の口腔・摂食に関する質の向上については、入院者数の減少などが目に見える形で現れたためサービスの向上につながったことが実感としてあった。継続して実施することが求められることで、繰り返しの研修を行い、重要性を認識し続けることが大切である。重度化する中で口腔ケア方法を個々に合わせていくことが今後も求められる。広い知識や工夫を加え対応していかなければならない。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、個人に関する情報は用いず、総体として捉えた。また、本研究発表以外では使用しないことを約する。

《7. 参考文献》

菊谷武 監修（2013年）・基礎から学ぶ口腔ケア・学研メディカル秀潤社

菊谷武 著（2008年）図解介護のための口腔ケア・講談社

《8. 提案と発信》

日々必要なケアであり、持続的に行うことがいかに大切なことか実感できた。また、今後も続けていかなければいけないことであり、とても意義深い経験であった。

【メモ欄】